

2026年度 一般選抜（前期） 2月1日

国 語

〈注意事項〉

- 1 解答はじめの合図があるまでは、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 解答用紙は折り曲げたり、汚したりしないでください。
- 3 問題は1ページから14ページまでです。
- 4 監督者の指示に従い、解答用紙に次の事項を記入し、マークしてください。

記入、マークするときは黒鉛筆（H、F、HBに限る）を使用し、誤ってマークした場合は消しゴムでていねいに消し、新たにマークし直してください。

- ①解答用紙の氏名・受験番号欄に「氏名」「受験番号」を記入し、受験番号マーク欄にマークしてください。

※記入例（受験番号「410324」：氏名「科学 大」の場合）

氏 名	科 学 大					
	①	②	③	④	⑤	⑥
受験番号	4	1	0	3	2	4

受験番号 マーク欄	①	0	1	2	3	●	5	6	7	8	9
	②	0	●	2	3	4	5	6	7	8	9
	③	●	1	2	3	4	5	6	7	8	9
	④	0	1	2	●	4	5	6	7	8	9
	⑤	0	1	●	3	4	5	6	7	8	9
	⑥	0	1	2	3	●	5	6	7	8	9

- ②入試区分欄の「一般前期（2/1）」をマークしてください。

入試区分	● 一般前期 (2/1)
教 科	● 国語 09

- ③解答用紙は、表面がマーク式の解答欄、裏面が記述式の解答欄になっています。
- 5 問題冊子は持ち帰ってください。

問題

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たちは、通常は「理解できない」他者の受容に必要なことは「理解できない」他者との相互理解を形成することだと考えている。私が「理解できない」他者を受け容れることができない理由は、その他者を「理解できていない」からである。問題の原因が「理解できない」ことだとするならば、私たちは「理解できない」他者とお互いの理解を深めあうことに成功すれば問題は自然に解決するという考えはごく自然だといっていいだろう。「理解できない」ものを「理解できない」まま放置する限り、問題は永遠に解決されない。私にとって必要なことは「理解できない」のであれば「理解できる」ようにする努力なのだということである。

確かに、このような考え方は理に適^{かな}っているように思える。問題は相互理解を深めあう仕方であるが、これはおそらく徹底的な話し合いということになる。したがって、この考え方に沿って「理解できない」他者を受け容れていく場合には、まず必要とされることは「理解できない」他者と積極的に話し合うということである。□ a □、この考え方は確かに説得力があるけれども、そして私たちがしばしば実際に選択する方法だけでも、どうしても見過ごすことのできない問題点がある。それは、この考え方が「お互いがお互いを理解しあっていないなければ共に生きていくことは不可能である」ということを暗黙のうちに前提にしていることである。この前提がなければ、「理解できない」他者と積極的にコミュニケーションするという、必ずしも楽ではない選択をあえて引き受けることが私たちにできなくなるからである。もちろん、「理解できない」他者とも話し合うことで必ず相互理解を達成することができるならば、このような前提が許されてよいかもしれない。しかし、□ b □ お互いがお互いを理解しあわなければ共に生きていくことができないとするならば、「理解できない」他者との相互理解形成に失敗した場合には、私たちは「理解できない」他者と共に生きていくことを諦めなければならないことになるのだろうか。

少し話し合っ、それでお互いにお互いを理解できるようになるなら、それは「理解できない」他者ではない。ここで「理解できない」他者と呼ばれている他者は、仮に十分時間をかけて話し合ったとしても、それでも完全にはお互いがお互いを理解できないような可能性を持った他者なのである。また、そもそも他者を理解することには原理的なナンセン⁽¹⁾が存在する。仮に私たちは徹底的に話し合うことで相互理解を形成することが可能だでしょう。しかし、「理解できない」他者との間で形成された相互理解が実際に相互理解になっているかどうかをどのようにして確認すればよいのだろうか。「理解できない」他者との間に相互理解が形成されたと感じたとしても、それが単なる誤解でしかなかったということは十分にありうる。そして、このような確認の困難な相互理解に基づいてしか「理解できない」他者と共に生きていくことが可能にならないのだとしたら、私たちにとって「理解

できない」他者と共に生きることのハードルは途端に高くなってしまうのである。

また、話し合いによって相互理解を深めようとする戦略は、そもそも話し合うことが不可能な状況では何の効力も持たない。そして、話し合うことが不可能な状況など簡単に生じる。c、話し合うことが他者との共同作業である限り、話し合いを私人ですることはできないからである。したがって、もし他者が話し合うことを拒否すれば、もはや話し合いを継続することが不可能となる。実際に、「理解できない」他者が話し合いを拒否することは可能性としては十分にありうることである。

このように、相互理解の形成によって問題を解決しようとする仕方は様々な問題点を持っている。しかし、こうした問題点はこのではじめて指摘されたという種類のものではないだろう。むしろ、私たちはメイリョウ²に自覚していないにしても、こうした問題をそれとなく感じていると考えられる。しかしそうだとするならば、相互理解による問題解決の試みがこのような困難を持っていることを私たちはある程度理解しながら、それでもなお相互理解にこだわってしまうとするならば、その理由は何なのだろうか。おそらくそれは、私たちが「他者との相互理解を拒否することは他者を排除することだ」と感じているからだと思われる。このように感じていれば、他者を受け容れることを決意したとき、他者を理解し、そして他者に理解されることは私たちにとって欠いてはならないことになる。しかし、このような考えは、ある重大な可能性を見落としている。それは、他者を理解しないまま、他者と共に生きる可能性である。

そもそも「理解できない」他者を受け容れるというとき、受け容れるべきものは何なのだろうか。可能性の一つは、「理解できない」ことを受け容れるということである。可能性のもう一つは、他者を受け容れるということである。そして、私たちは後者をより重視しがちだけれども、「理解できない」他者の受容³のセイヒ³を握っているのは前者の可能性なのである。「理解できない」他者を「話し合えば理解できる」存在としてでなく、あくまでも「理解できない」存在として受け容れることは選択肢の一つとしてありうる。そして、そのような選択をした場合にも、他者と共に生きることは可能なのである。

しかし、この可能性が十分に自覚されていないければ、私たちは「理解できない」他者に会い、かつその他者に話し合うことを拒否された場合には、仮にホイン⁴でないにしても他者を排除することの方を選択しようとするだろう。達成すべきことが達成できないこととわかっていれば、問題そのものの存在を否定することでは、問題を解決することができないからである。相互理解という言葉は美しいけれども、相互理解にこだわりすぎれば、相互理解を達成することが私たちにとって重荷になる。もし私たちがこの他者とは相互理解が不可能だと思ってしまうえば、残された選択肢はもうただ一つしかない。それは、他者を排除するという選択肢である。

他者と共に生きることを選択してしまった以上、私たちはお互いについて理解を深めあわなければならないという言い方は、ど

こか抑圧的でないだろうか。確かに、共に生きていく以上、お互いがお互いのことをよく理解しあっていることが望ましいことはいうまでもない。この命題の正しさを否定することはできない。(イ)しかし、それは理解しあわなければならないということではない。また、お互いがお互いを理解しなければならぬ以上、私たちは他者とよく話し合わなければならないという言い方も、どこか抑圧的である。確かに、お互いがお互いを理解するためにはよく話し合うことが必要になってくるのは当然である。

d、この命題についてもその正しさを否定することはできない。しかし、話し合うことを拒否する他者をむりやり話し合いの場に連れ出すことがそれほど望ましいことなのだろうか。(ロ)そのようなことを要求する言い方が問題の解決にキヨ⁽⁵⁾するとは信じがたい。

むしろ、私と他者がお互いに理解のしがたさを感じるときに、そうした感覚を無視してあくまでも相互理解のために話し合うことを他者に要請することは、他者に対して極めて暴力的に作用すると思われる。にもかかわらず、従来の社会理論では、相互理解の形成に向けて努力することがしばしば肯定的に語られてきた。(ハ)しかし、現実においては、相互理解を形成しようとする営みが(そのような営みに参加することを要請された)当事者に対してリフジン⁽⁶⁾な苦痛を与えている場合もある。なぜなら、私⁽⁶⁾が他者に対して相互理解を形成するための話し合いに参加するように要請することは、いわば他者に対して「私の言っていることを理解しろ」といっていることと同じことになるからである。

私⁽⁶⁾が他者に対して要請するのであれ、あるいは他者が私に対して要請するのであれ、相互理解の形成に向けて努力すること、このことの要請がある種の暴力性を帯びてしまうのは、仮に相互理解が形成されたとしても私⁽⁶⁾たちには真の意味で相互理解の正しさを検証する手段がないことに起因する。どのようにして相互理解を形成しても、形成された相互理解が本当に私と他者とで一致しているのかを確認することは原則的には不可能である。だとするならば、私⁽⁶⁾たちは相互理解の根拠を問わないことで、かろうじて相互理解の正しさを受け容れるほかないのである。

相互理解の虚構性を指摘したけれども、これはすべての相互理解は欺瞞^{まを}だということをいっているのではない。(二)そもそも、すべての相互理解が欺瞞だとするならば、「相互理解は欺瞞である」ことをわざわざ指摘する意味などないだろう。そうではなく、相互理解の虚構性という指摘は、それが正しいのかそうでないかを問題にすることができないという相互理解の性格を記述しているに過ぎない。そして、確認できないことについて「それは厳密に相互理解である」ことを私⁽⁶⁾たちが信じるためには、相互理解されている中身について誰もあえて言及しないことが必要になってくる。(ホ)私⁽⁶⁾たちは、日常において常識とは何なのかをいちいち他人と確認しあいながら生きてはいない。そして、常識が何であるかをはっきり確認しないからといって、そのことで私⁽⁶⁾たちが困ることもない。私⁽⁶⁾たちはその理由を「何が常識的で何が常識的でないか」に関する判断が自明すぎてあえて確認するまでもない

からだと思っている。しかし、真実は異なる。確認してしまえば相互に理解しあっていると思っていたことが必ずしもそうではなかったことが明らかにされてしまう。それゆえ、確認したくても確認できないのである。現実には常識はずれの行動をとる人は存在する。私たちは、そのような人を実際に目の当たりにしたとき、どのように行動するだろうか。私たちは、あえて見て見ぬ振りをすることが少なくないだろう。それは、相互理解が自らの根柢のなさを覆い隠すために私たちに對して抑圧的に作用していることの一例だと考えられる。

数土直紀『理解できない他者と理解されない自己』

問一 傍線部(1)～(6)と同じ漢字を使うものはどれか。それぞれ最も適当なものを、次の各群の中から一つ選びなさい。

(1) ナンテン

- ① ナンジャクな精神を鍛え直す。
- ② ナンパ船から乗員が救助される。
- ③ 名家のチャクナンとして生まれる。
- ④ 防災用品をナンドに保管する。
- ⑤ 凍らない港を求めてナンカ政策が推進された。

(4) ホンイ

- ① イシヨウを凝らした作品が完成した。
- ② 国のイシンをかけて戦う。
- ③ 計画についてイゾンはない。
- ④ イシヨク足りて礼節を知る。
- ⑤ 全権をイニンする。

(2) メイリヨウ

- ① リヨウシキのある行動をとる。
- ② コウリヨウとした風景が広がっていた。
- ③ ホンリヨウを發揮する。
- ④ 両者の力の差は一目リヨウゼンだ。
- ⑤ 一刀リヨウダンにする。

(5) キヨ

- ① キバツな発想で人を引きつけた。
- ② キヒンのある物腰。
- ③ 鳥にキセイする虫。
- ④ キピンに行動する。
- ⑤ キシヨウ価値のある品。

(3) セイヒ

- ① 古くから野菜のソクセイ栽培が行われた。
- ② 校歌をセイシヨウする。
- ③ 記念祝賀会は満員のセイキヨウだった。
- ④ イセイのいい声が飛び交う。
- ⑤ セイコウなからくり人形。

(6) リフジン

- ① ジンソクな対応が大切だ。
- ② その行為はジンギにもとる。
- ③ 災害の被害がジンダイだ。
- ④ ジントウ指揮をとる。
- ⑤ 震災の復興にジンリヨクする。

問二 空欄 a) d に入る言葉として最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選びなさい。ただし、同じものを複数回使ってはならない。

- ① もし ② むしろ ③ なぜなら ④ まるで ⑤ しかし ⑥ したがって

問三 傍線部A「『理解できない』他者と共に生きることのハードルは途端に高くなってしまふ」とあるが、なぜか。八十字以内で説明しなさい。ただし、句読点、記号も字数に含む。

問四 傍線部B「達成すべきことが達成できないこととわかっていれば、問題そのものの存在を否定することでしか、問題を解決することができない」とあるが、どういうことか。最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① 「理解できない」点について他者が相互理解を深めあうことを拒否するのであれば、それ以外の点について理解をより深めあうしかないということ。
- ② 相互理解の形成によって何らかの問題を解決しようとしてもできないことが明らかであれば、問題の存在自体を否認するしかないということ。
- ③ 「理解できない」他者と相互理解を達成するのが難しければ、「理解できない」という事実を目をつぶって「理解できた」ふりをするしかないということ。
- ④ 「理解できない」他者との相互理解形成に失敗した場合には、私たちはそのような他者と共に生きていくことを諦めなければならぬということ。
- ⑤ 「理解できない」他者と話し合うことによって相互理解を深めあうことができないならば、話し合いという手段そのものを排除するしかないということ。

問五 次の一文は、本文中の（イ）～（ホ）のどこに入るか。最も適当なものを、後の①～⑤の中から一つ選びなさい。

誰かに「王様は裸だ」と指摘されれば「王様は裸でない」ことを積極的に明らかにする必要が生じるけれども、誰もが「王様は裸だ」と指摘しなければ、そして誰も指摘しない限りにおいて、「王様は裸でない」と私たちは思い込むことができる。

- ①（イ） ②（ロ） ③（ハ） ④（ニ） ⑤（ホ）

問六 傍線部C「相互理解が自らの根拠のなさを覆い隠すために私たちに対して抑圧的に作用している」とあるが、どういうことか。最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① 「何が常識的で何が常識的でないか」に関する判断は自明すぎるため、他人に確認するのは恥ずべきことと考えられていること。
- ② 相互理解は虚構性を有するものであるため、それが正しいか否かについては誰もあえて問題にすることができないという事。
- ③ すべての相互理解は欺瞞であるにもかかわらず、話し合いで相互理解を深めなければならないと一般的には考えられていること。
- ④ 形成された相互理解が本当に私と他者で一致しているかを確認するためには、結局当事者同士で話し合うしかないという事。
- ⑤ 相互理解の形成には失敗することがあるにもかかわらず、相互理解なしには他者と共に生きていけないと考えられていること。

問七 本文の内容と合致しないものはどれか。最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① 徹底的に話し合うことにより「理解できない」他者との相互理解を常に深めあえるのであれば、「お互いがお互いを理解しあっていないければ共に生きていくことは不可能である」という前提があってもよいかもしれない。
- ② 「理解できない」他者とは、仮に十分時間をかけて話し合ったとしても、それでも完全にお互いがお互いを理解できないような可能性、および、そもそも話し合いを拒否する可能性を十分に持つような存在のことである。
- ③ 「理解できない」他者を受け容れるというとき、「理解できない」ことを受け容れるということが選択肢の一つとしてありうるが、相互理解にこだわってしまうとするならば、そのような可能性を見落とすことになる。
- ④ 他者と共生する以上、私たちはお互いに理解を深めあわなければならないが、また、そのためにはよく話し合わなければならないという命題がどこか抑圧的であることについては、従来の社会学理論でもしばしば語られてきた。
- ⑤ 私たちには真の意味で相互理解を検証する手段がないことこそが、理解のしがたさを無視してあくまでも相互理解のために話し合うことを他者に要請することがある種の暴力性を帯びてしまう原因であるといえる。

問題一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ぼくが『第四間氷期』という小説を書いたのは、今から二十六、七年前のことでした。一種の未来小説で、よりよい未来を実現するためには現在をどう軌道修正すべきか、コンピューターを使って未来予測をする話です。完成した予測機はいちおう詳細な未来の予想モデルを描き出してくれました。しかし開発者である主人公はどうしてもその結末が気に入らない。その予想モデルによると、環境の異変をのがれて近未来の人間は、遺伝子組替えの技術を使ってエラをはやし、水棲人間^{（イ）}に変わってしまった。

この許しがたい未来から人間の運命を守るために、主人公はこの結果を世間に公表しようとする。ところが未来がカンショウ^{（1）}してくるのです。すでに水棲人間として誕生してしまった人間にとっては、水棲であることはべつに不幸でもなんでもない。むしろさまざまな利点さえある。過去の陸上人間の遺産を受け継ぎ、改良を加え、彼らなりの文化を築きあげて行くつもりらしい。未来に現在の価値基準を持ち込んではいけない、現在の単なる延長が望ましい未来だとは限らないのだ、と対話能力を持ったコンピューターに主人公はさとされるのですが、おいそれとは納得できません。いくらリクツ^{（2）}ではそうかもしれないと思っても、心情的に拒否反応をおこしてしまう。あげくに秘密裡^{（ロ）}に組織されていた未来からの刺客に暗殺されてしまうわけです。しかしそのころコンピューターの中では、未来の水棲人間のあいだにちょっとした病気が発生するをはじき出している。奇妙な自殺病です。水中ではもう必要がなくなった涙腺^{（ハ）}や鼓膜^{（ニ）}の痕跡が残っていて、わけもなく風の音が聞きたくなくなり、呼吸できない地上に這^{（ホ）}い上って涙を流しながら死んでいく……（ロ）

発表当時、一部の作家や批評家がこの小説に対して示した強い拒否反応には、小道具として使われたコンピューターや遺伝子工学といった仕掛けに対する反発もあったでしょう。あの頃はまだ誰もコンピューターが実用化されるとは思っていませんでした。わずか二十数年前のことです。取材のために今のNTTの前身である電電公社の研究室を見せてもらったことがあるのですが、当時のコンピューターはまだ真空管時代で、大きな図書室ほどの部屋に真空管や電線の束がぎっしり張りめぐらされた、かなり大げさなものでした。しかし実用化にはほど遠く、研究員たちもさほどの夢は持っていなかったようです。とくに人工頭脳についてはまったく否定的でした。丸ビルほどの容量が必要だろうし、とても冷却方法が間に合わないというわけです。こういう場合技術屋さんというのは、功をあげる反面、意外に禁欲的な態度をとるようです。

I あれから二十数年たって、今では名刺サイズの電卓が普及し、人工頭脳もすでに現実のプログラムにのぼってしまっただ。まったく信じられないほどの変化です。この先、技術革新の加速はますます早まるのかと思うと、きゃしゃな乳母車に七〇〇

○ccの大排気量エンジンを積んで走らせているような不安さを感じるので。それではあの小説に対する拒否反応もすでに解消したと考えていいのでしょうか。いや、そうは a がおろしません。ある種の過敏症の人にはいぜんとして主題そのものが気に入らないはず。現在と未来とでは価値基準が変わってしまうかもしれない、という歴史観……こうあってほしいと思う未来像を、かならずしも未来が受け入れてくれるとは限らないという二ヒリズム……よく考えるところで二ヒリズムではないのですが、真剣に時代の行方(な)に想いを馳せていなければならないほど、よけい神経を逆撫でにされかねない。人間は長い歴史をくぐり抜けてきた文化的連続体ですから、たえざる革新を身上にする技術のような身軽な変化にはなじみにくいのです。不変なものを求める気持ちは、人間、のみならず多くの動物にとっても、本能的な衝動の一つでしょう。(ハ)

時代の変化が急加速されるほど、恒常性にシウウチャクする心が正比例して強まるのは当然の成り行きです。「反技術主義」の傾向は、たぶん、文化を支える重要な柱の一本である b に根差すものでしょう。まして修復不可能な環境破壊、核兵器に端を発するとどまるところを知らない兵器の開発競争、フランケンシュタインの発明を思わせる遺伝子工学の進歩……こうしたあからさまな赤字の帳尻を突きつけられてしまったのですから、技術不信のうねりが大きな時代的潮流になったとしてもべつに不思議はありません。

だが、怪物フランケンシュタインでさえ、シェリー夫人の原作のなかでは醜悪な外見を与えられた美しい魂として描かれているのです。外見のために誤解された怪物の孤独の訴えが、あの作品のテーマなのです。映画はそのテーマを通俗化しただけでなく、完全に裏返しにしてみました。ここでうっかり「反技術主義」に同調したりしたら、それこそ映画のフランケンシュタインの再復活に手を貸すことにもなりかねない。 II 大気汚染や核兵器は、弁解の余地のない怪物です。情状酌量の余地のない悪です。しかしその責任ははたして技術自身にあるのでしょうか。企業の利潤追求、国家のエゴイズム、産業の軍事化、そういった技術の利用のされかたを問わずに、単純に技術主義批判に走るのは問題のすり替えにならないでしょうか。

III ぼくが現在の立場から『第四間氷期』の続編を書くとしても、たぶん同じようなストーリーになるでしょう。未来にさからった主人公はやはり裁きを受けられるでしょうし、未来も風の音楽にあこがれて自殺を選ぶ異端者の抹殺までは出来ないのです。すすんでこの葛藤を受け入れられないかぎり、目を開いて現代を生きることは不可能でしょう。「技術礼賛」の夢がすでに色あせてしまったように、「反技術主義」もほとんど有効性のない老人の愚痴にしか聞こえません。

だいたい《技術》対《人間》という二元論が、ぼくには胡散臭く思われるのです。技術自体は B けっして人間、もしくは人間性の対立物ではありえない。技術というのには要するに、道具を使って何かをする、その行為のプログラム全体を意識化することでしょ。人間は技術的成果に満足感をおぼえるだけでなく、プログラムの完結自体に深い喜びを感じることさえあるのです。それは技

術に投影された自己発見の喜びです。技術というのは本質的に人間的なもののなのです。

大事なのは多分、技術が内包している自己投影と自己発見の問題でしょう。あるときぼくはカメラのちよつとした故障を修繕しながら、うまくいきそうになったとき、無意識のうちに「人間は猿ではない、人間は猿ではない」と呪文のように繰り返しているのに気付きました。もちろん猿だつて多少は道具を使えることくらいよく知っています。けつして猿を差別視するつもりはありません。(二) ぼくの呪文は、単に作業をプログラム化できたことの喜びを表現しようとしただけのことです。ところでこの「作業のプログラム化」とは、いったい何なんでしょう？ 試行錯誤もあるでしょうし、イメージのなかでの座標転換作業もあるでしょう。しかしけつきよくは時間軸にそつた手順の見通しです。自分の行動と対象の変化を、因果関係として総体的に掌握することです。《ことば》の力を借りなければ出来ることではありません。もともと自己投影とは《ことば》の構造そのものなのですから。

じつを言うとしばらく前から、現代の混沌とんを解説する鍵として《ことば》の謎の解説に注目しはじめていたのです。ちよつとした機会に分子生物学の勉強をしたおかげでしょう。勉強といつても素人のことですから、ほんの生齧かりにすぎません。しかしある種の感動を禁じえませんでした。生命現象を分子レベルで解明したこの学問は、単なる還元主義的成果にとどまるものではないのです。最近はその応用である遺伝子工学が脚光をあびすぎて、肝心の思想的側面は忘れられがちですが、あんがいこれは進化論に比肩しうるものかもしれません。少なくとも進化論にとつて強力無比な援軍であることは確かでしょう。(ホ) とにかく系統発生の筋道が客観的に検証可能なものになり、系統発生と個体発生を一つの場合で扱えるようになったのです。しかしちよつぱり気になったのは、何人かの分子生物学者が今後の研究課題として、異口同音に《精神》の領域をあげていたことでした。なぜ《ことば》と言わずにいきなり《精神》などというあいまいな概念を持ち出すのだろう？ 急にあらためて《ことば》の問題にこだわらざるを得なくなつた。こだわりはじめてみると、ここが極端な c 地帯であることに気付きました。あらゆる領域に隣接しながら、手つかずのまま放置されているのです。《ことば》が扱いにくいことは確かです。《ことば》を考えるのもまた《ことば》によるしかないのですから。ちよつと鏡と問答を交わすような、不確かで思弁的な作業です。そしてとつさに次の三人の名前を思い浮べていたのです。ロシアの脳生理学者I・パブロフ、オーストリーの動物行動学者K・ローレンツ、アメリカの言語学者N・チョムスキー、《ことば》についての先駆的な見解を示した三人です。

もちろん d で、立場も違うし、方法も違います。しかし合成写真を作るように、三人の見解を重ね合わせて強い露光を与える、かなり鮮明な絵柄が浮びあがってくるような気がするのです。

安部公房「シャーマンは祖国を歌う」

(注) *フランケンシュタイン……メアリー・シェリーの小説『フランケンシュタイン』(一八一八年)に登場し、人間と意思疎

通をとることのできる人造人間の発明に成功した科学者の名前。同作品が一九三一年にアメリカで映画化された際には、人造人間は殺人を繰り返す怪物としての面が強調されており、その怪物がフランケンシュタインと呼ばれるようになっていった。

問一 傍線部(1)～(6)のカタカナを漢字に改め、漢字をひらがなに改めなさい。

問二 次の一文は、本文中の(イ)～(ホ)のどこに入るか。最も適当なものを、後の①～⑤の中から一つ選びなさい。

コアラでさえ動物園の移転で死んでしまうことがあるのですから。

- ① (イ) ② (ロ) ③ (ハ) ④ (ニ) ⑤ (ホ)

問三 空欄 I Ⅱ Ⅲ に入る言葉として最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選びなさい。ただし、同じものを複数回使ってはならない。

- ① しかし ② および ③ もし ④ それとも ⑤ もちろん

問四 傍線部A「未来にさからった主人公はやはり裁きを受ける」とあるが、『第四間氷期』において主人公がどうなったことを表しているか。九十字以内で説明しなさい。ただし、句読点、記号も字数に含む。

問五 空欄 a b c d に入る言葉として最も適当なものを、それぞれ①～⑤の中から一つ選びなさい。

- | | | | | | |
|---|------------------------|--------|-----------------------------|----------------------------|--------|
| a | ① 桶屋 <small>おけ</small> | ② 空屋 | ③ 問屋 | ④ 万屋 | ⑤ 一発屋 |
| b | ① 進化 | ② 発明 | ③ 競争 | ④ 混沌 | ⑤ 伝統 |
| c | ① 空白 | ② 乾燥 | ③ 泥流 | ④ 密集 | ⑤ 戦闘 |
| d | ① 一致団結 | ② 三者三様 | ③ 一蓮 <small>れんたぐ</small> 托生 | ④ 切磋 <small>さたく</small> 琢磨 | ⑤ 竜頭蛇尾 |

問六 傍線部B「技術自体はけっして人間、もしくは人間性の対立物ではありえない」とあるが、それはどのようなことか。最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① 人間にとって大事であるのは技術が内包している自己投影と自己発見の問題であり、この問題を解明することは進化論の思想的側面を想起して生命にとってよりよい未来を描くことになり得るということ。
- ② 技術とは道具を使って何かをする、その行為のプログラム全体を意識化することであり、それは《ことば》の構造そのものであるのみならず、人間の精神の領域を解明することにも繋つながるということ。
- ③ 《技術》対《人間》という二元論は、生命現象を分子レベルで分析する過程では成り立たなくなるものであり、どちらも生命が進化してきた系統発生と個体発生の検証の問題に行きつくということ。
- ④ 人間は技術的成果に満足感をおぼえるだけでなく、道具を使って何かをする、その行為と対象の変化を時間軸にそって総体的に掌握してその作業を完結することにも深い喜びを感じるということ。
- ⑤ 技術とは長い歴史をくぐり抜けてきた文化的連続体である人間がイメージの座標転換作業を行うことであり、不変なものを求める気持ちを忘れなければ未来にとって望ましい成果に結びつくということ。

問七 本文の内容と合致しているものはどれか。最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① 自殺数の増加は現代社会の病理を反映していることが指摘されており、それを食い止めることは喫緊の課題であるゆえ、
けっして未解決のままにして未来に持ち越すことは許されない。
- ② 遺伝子工学の開発速度はますますはやまっており、それに伴って人間の価値観も多様なものとなっているが、いかなる
変化が生じようとも変えることは許されない生物の本質が存在する。
- ③ 人工頭脳を正しく利用することは望ましい未来を描くことに繋がるが、シエリー夫人がフランケンシュタインを描くこ
とで警告していたように、それは修復不可能な文明破壊に結びつく危険性も有している。
- ④ コンピューターは以前にくらべると信じられないほど進化しており、未来を予測できる精度も確実に高まっているが、
それは人間性を否定するリスクを内包していることを忘れてはならない。
- ⑤ 《ことば》は《ことば》によって考えるしかなくきわめて扱いにくいものであるが、《ことば》はあらゆる領域にかかわ
るものであり、現代の混沌を解読する鍵になるにちがいない。

